

令和7年度第1回京都府総合教育会議

- 1 日 時 令和7年5月13日(火) 午後2時30分から4時まで
 - 2 場 所 京都府自治会館 自治会館ホール
 - 3 出席者 西脇知事、前川教育長、小畑育委員（教育長職務代理者）、
安岡教育委員、藤本教育委員、鈴鹿教育委員
 - 4 次 第
 - (1) 開会
 - (2) 意見交換
 - (3) その他
 - (4) 閉会
-

1. 開会

○出席者紹介

○知事挨拶

委員の皆様、お忙しい中、令和7年度第1回総合教育会議にお集まりいただきまして、ありがとうございます。この会議は、教育委員会の皆様と意見交換をする場ございまして、その意見交換の中から、現在の京都の教育行政の現状と課題を共有した上で、今後、連携して講じていく教育施策についても議論をしていきたいというふうに思っております。

本日のテーマは「文化が活きる京都の推進に向けた取組について」です。

当会議では、令和2年の11月に「京都の文化力を生かした教育について」、令和4年1月にも「文化庁移転を機とした文化政策の推進について」ということをテーマにしました。

文化の頻度が多過ぎるんじゃないかなとも思ったんですが、令和4年のときには、文化庁がいよいよ1年後に移転してこれられるということで、コロナ禍もあり、受け入れの態勢の整った中でどういうふうに、文化庁を迎え、文化政策を進めるかという観点だったんですが、今年度はその文化庁移転から2年が経過し、3年目を迎えております。

この間、都倉長官も含めて、文化庁の職員の方たちも、京都になじむというか、京都での仕事にも、色々溶け込んでいただいていると思っておりますし、例えばお祭りなんかでも、要人役で参加いただくなど、東京にいる時には考えられなかったようなことだと思っております。そういう意味でも、地元密着、ただし、文化庁の京都移転は、京都のためだけということではなくて、全国の地方創生、文化を活かした地方創生に繋げていくということで、移転してこれられましたので、そういう意味では本当に実を上げていかなきゃいけない状況です。

今年は、大阪・関西万博の開催年であり、万博関連イベントにも、できる限り、文化の要素を入れ込みながら進めておりますけれども、この間、私ども、昨年7月に「文化が活きる京都の推進に関する条例」を制定いたしまして、現在その条例の基本指針というのを作って

おりますが、その策定にも是非とも活かしていきたいと考えております。

やはり文化を育むためには、できる限り、若い時から文化に親しんで、京都に文化庁が来て文化政策をとということであれば、まずは地元の人間が文化をよく知り、学ぶということが重要であり、そういうことから、子どもさんに向けた文化施策みたいなことも、是非とも取り組んでいただきたいと考えております。そういった色んな思いを踏まえまして、今回、改めて、文化をテーマとさせていただきました。趣旨については、後ほど、もう少し詳しくお伝えいたしますけれども、いずれにいたしましても、忌憚のない御意見を賜ることをお願い申し上げます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

○前川教育長挨拶

教育委員会を代表して、御挨拶申し上げます。

先ほど知事からお話がありましたように、総合教育会議では、学校視察等も含めて、京都府の教育の課題認識について、意見交換をさせていただきました。

今回は、「文化が活きる京都の推進について」ということでございますが、受け継がれてきた伝統文化、暮らしに根ざした生活文化と、日本全国の文化というものを集約できるような要素が沢山あるのではと思います。

そういった中で、子どもたちの発達段階をしっかりと踏まえながら、教育の中で、文化の担い手、あるいは文化が子どもたちを心の発達等による成長も含めて、しっかりと、今日、意見交換させていただければというふうに思います。

その中から、私ども教育委員会の新たな施策の方向性等を見出していけたらと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○「文化が活きる京都の推進に向けた取組について」～概要説明

(文化生活部 梅原副部長)

(教育委員会 相馬指導部長)

○意見交換

(西脇知事)

今日も意見交換のテーマを2つのパートに分けて行いたいと思います。

現在、条例に基づく基本的な指針の策定作業に取り組んでおります。色んな所で私も話していますが、京都の魅力は1,000年を超えて受け継がれてきた文化が今の生活に根づいているところであり、文化は幅が広いものです。神社とか、伝統的史跡、建造物があるが、これも今の宗教的行事の中心かもしれませんが、単に物として存在するだけではなくて、活動が行われており、お花、お茶も生活文化で、食であれば、皆さん、毎日関わっておられるということもあります。お茶、食を支えている器、しつらえには、伝統芸能とか、文化的な要素が沢山含まれているが、それぞれ、生活の中に溶け込んでいるということです。

ただ、ライフスタイルが変わってきており、年齢構成の問題、地域コミュニティの衰退と
いうことがあり、生活文化への影響が非常に大きいため、何とか生活文化を支えていくため
には、私の思いとしては、若い内から、京都の文化に愛着を持ってもらうことが重要じゃな
いかということです。

特に、これは府内の大学生の定着率が 17%台ということで、外から来ている学生も多い
けれども、子どもの内から京都の文化を知ってもらうことも、若者の京都定着にも繋がるの
ではないかと考えています。

そこで、まず最初は、学校現場に絞った中で、児童・生徒に、伝統、文化に親しんでもら
う、興味を持ってもらう、理解してもらうということで、今までの紹介にあったように、色
んなことをやっていただいておりますが、さらに、学校現場としての取組の工夫等について、
御意見を承りたいと思います。学校現場以外のすごく広い観点は、後のテーマとして、学校
現場での取組についての御意見あればよろしくお願いします。

(小畑委員)

私の問題意識は、高校の無償化っていうのが実現しているところですけども、その中で、
公教育の存在意義あるいは果たすべき役割っていうのは、改めて問い直されているのでは
ないかと思っています。そういう意味では、今日の会議のテーマのような、文化の力で地域
を活性化させていこう、そのために教育がどういう役割を果たしていくべきかというそう
いうテーマだと思います。そういう意味で、非常に、私たちにとって、大事なテーマという
ふうに認識をしています。

最初、知事からお話があった問題提起の中身について申し上げますと、私達も海外によく行
って仕事をして、日本に帰ってきてと、そういうことを繰り返していても、その国の事をほ
とんど理解できていません。ところが、1回でも、現地の人と一緒に、その人の家庭を訪問
したり、家庭料理を食べさせていただいたり、あるいは民俗芸能に触れたりすると、格段に、
その国に対する理解が深まったような感じがしますし、その国の人達との信頼関係が高ま
ったという感じがします。だから、文化はそういう不思議な力を持っているという感じがし
ます。

だから、京都にしても、京都の文化を子どもの頃から、しっかりと親しむ、つまり、学ん
で理解をしていく、ということだと思いますけれども、そういうことをしていくと、その人
たちが大人になって、異文化の人や、外国の人と付き合っていく時に、非常に大きな力にな
ると思います。それから、とりわけ、京都の文化は、他所から見るとものすごい魅力がある
わけですね。それだけ力のある文化を持っているということですから、そういう力のある文
化を子どもの頃から理解をし、学んでくと、大きな地域の活性化とか京都の発展に向けての
大きな力になっていくと思います。

子どもの頃から、京都の文化を学び、理解していくことが大切ですが、そのために、教育
として何ができるのかということで、多分幾つかあると思いますが、私は2つ申し上げてお

きたいと思います。

1 つは、探究エキスポの話もあって、少し重なる部分があるかもしれませんが、今の探究型学習のテーマにそれぞれの地域の文化や、或いはその文化を使って、その地域を活性化するためにはどうしたらいいのかというテーマを取り上げて、繰り返し、探究型学習の中で、皆で議論をしていくってということが大事なことだと思います。

探究型学習のいいところは、その事業を作っていくプロセスだと思います。このプロセスは、学校が中心になって、地域の人達、地域の会社、地域の農家、地域の団体あるいは地域の文化的なことややっている人達かもしれない、もちろん神社仏閣もありますが、そういう地域の色々な視点と一緒に、その探究学習を作っていくことです。探究学習は、そういうことができます。

一緒に学習を作っていくって、どんなテーマにしようか、子ども達にどういうストーリーで勉強・学習してもらうか、あるいは、地域にどういう教材を提供していくって、どんな教育の機会を提供していくのかと、一緒に、学校が中心になって話をしていきます。そういうことをしていくと、今、崩れかけている地域のコミュニティで、対話の中で新しいものが芽吹いていくトリガーにできるのではないかという気がしています。そういう意味で、地域文化を探究する学習を地域の人と皆で作って、それを生徒が実際に学習をしていくという、単に教育ということではなく、探究型授業でできるのではないかと思います。

探究型の地域文化に関する学習を、各学校で、至るところでやるのが良いと思います。文化は、文化財がないと文化ではないということではなく、文化は生活そのもので、どこにでもあるわけで、それをみんな気づいていません。そういうことを気づいていくことも非常に大事なんじゃないかという、地域文化探究学習プロジェクトのようなものを、京都府版のムーブメントを起こしていくと、面白いと思います。文化を勉強した子どもたちが、それぞれの地域にある文化を勉強していき、子どもたちが大きくなっていったら、その地域の活性化の力になっていくと思います。

そういうムーブメントの鍵になるような役割を、学校と公教育が果たしていく、これは、やはり公教育でなければできないことではないかと思うので、そういう役割をぜひ果たしていきたいと思います。

もう 1 つは、文化は、さっき知事がおっしゃったように、生活そのもので、生活の中のしきたり、立ち振る舞い、食生活あるいは歳時とか、そういうものが文化であると思います。だから、京都の人に、文化の魅力は何かと聞いても、10 人中数人しか答えられないのではと思います。つまり、自分達の身についているものは、なかなか気がつかないのです。文化とはそういうものではないかと思います。

ところが、他所から観光で来た人は、神社仏閣を回ることもあるかもしれないけれど、京都の街中を散策する中で、京都の人達の生活の中から滲み出てくるような生活感を持った文化を掴み取って帰っていくのです。だから、京都は素晴らしい街だと、京都の文化はすごいと言います。これは、神社仏閣のことだけではないと思います。何が違うかというと、他

所から来た人は、京都の文化を客観視することができます。京都の外から来た人は、京都の文化を客観的にしか見られません。そうすると、京都のことがよくわかります。逆に、京都の人は、京都の文化そのものを身にまとっているから、客観視することができないので、自分自身の色がよくわからないのではないかと思います。

では、教育は何をしたら良いかという、自分達の身の回りにある生活そのものの文化を客観視する教育をしていくことが、自分達のその文化、文化財とか、お寺とか外に見えるものではない、自分達の本質的な文化を理解してもらえるのではないかと感じます。

そのためには、どういう教育をしたら良いのかという、例えば、外国の人とか他所の人が、京都の文化が素晴らしいと言うが、何が素晴らしいと言うのかを調べさせる、学習させることです。それは、まさに自分たちの文化の客観化です。それから、もう1つは、自分達の生活のスタイル、立ち居振舞いを分析させて、それが他所の地域と何が違うか、その違いが京都の魅力や、強さだったりします。

そういう教育、学習の機会を積極的に作っていくことです。まさに、京都文化客観化教育、そういうプロジェクトをもっと行えば、子ども達が自分達の身の回りにある文化をしっかりと理解していきます。非常に力のある文化を学んだ、あるいは客観的に形として覚えた子ども達は、必ず、京都の力強い文化を使って、その地域を活性化させ、あるいは京都の発展、貢献してくれるはずです。そういうことを目指した教育をしていくことが大事じゃないかと思っています。

いただいた資料で見ていくと、例えば、宮津市のふるさと宮津学、子ども学芸員など、新しい地域文化の取組は、自分の文化を客観視できるよい教育だと思います。

(藤本委員)

会議で東京に行くと、色んな都道府県の先生から京都は良いですね、本当に色んな美味しいところもあるし、素敵なお店もあるし、景色も良いし、素晴らしいですねって言われます。でも、私が京都をどこまで知って、誇りに思っていて、自分自身の生活にどれくらい取り込めているのかと思ったらとんでもないと、他県の方の方が京都の良さをよくご存じだと思います。

同じく、これだけ生活が多様化してきていると、本当に色んな価値観があるので、伝統文化の大切さはわかるけれど、私達は私達みたいな、そういう方々が圧倒的に多くて、その中で、先ほど色々と教えていただいたような取組は、本当に大切な取組だと思います。

そこで、色んな機会に出会う、色んなことを知って学ぶ、そこから主体的に自分なりにやるっていうのは、やはり教育現場として、意味があることだと思いますが、それを1回体験してどこまで定着するかは、また別問題です。何か授業としてやらないといけない授業があって、それをやりましたとチェックが入るだけでは、だめだと思います。その中で、一体何を学んで、その経験がどういうふうに活かされたかというところを、しっかり追跡していかないと、いわゆる文化を考えていく上では、単なる体験に終わると思います。

そういう意味では、先ほど皆さんがおっしゃった探究型、そういう学習の様々な段階を踏んだプロジェクトで、継続的にやっていくことで、受け身で教えてもらう立場から、だんだんと主体的に、自分が学びの主体者として獲得したものを、若い人達あるいは地域の人たちと一緒に実践者となっていく、そういうプロセスは、とても大事だと思います。

ただ、それを、特に、年次が高い学校現場でやろうと思えば思うほど、大学なんか比較的に入れやすいと思うが、高等学校ではカリキュラムがぎゅうぎゅうに詰まっていて、いわゆる学校の先生方の働き方改革と言われている中で、これを入れていく非常に難しさ、矛盾点が沢山あるかと思うのです。でも、そこを、府立高校ならではの、私立ではできない、地域と、京都の伝統とタッグを組んだ取組ってというのが、府立高校の生きていくこれからの道として、1つのテーマになり得るのではないかと思います。

私は幼稚園の園長をしており、その立場から言うと、本当に小さい子ども達ができるのかわからないという思い込みがあるかもしれませんが、前のときもこの話をしましたが、小さい内こそ、本物の世界に触れさせてあげることです。大人が、演出、プログラムを作っておいて、是非、本物に出会うような機会を沢山作っていただけたら本当にいいと思います。

鈴鹿さんがいらっしゃいますけど、去年、右京区のPTAの親子の研修会で、お話と八つ橋を作ることがありました。ケーキでもよかったのかもしれないし、パティシエさんでよかったのかもしれない。お母さん達も八つ橋をつくれる、こんな素材でこうしたらできるんだというような、何となく知っていることと、やってみることに違いがあって、親子で一緒にそういう経験をしていくことが、とても大事だと思います。

日本では、家庭でそういうことを過ごす時間、家庭でいわゆる文化に触れる、京都文化が良いというわけではありませんが、知らず知らずのうちに、家庭の中で文化を取り込んでいくみたいな時間がものすごく減っています。私は本当に危惧していて、京都もそうだと思います。

これだけコンビニエンスストア、ドラッグストアがあって、御関係の方に申し訳ないけど、別に家で何をしなくてもいいわけで、365日24時間開いていたら手間を省くわけで、できたもので生活していくという実態があると思います。手間をかけていくということを、一般家庭ではなかなか難しいと思うので、そういう意味のある手間のかけ方というのは、教育現場で親子に経験してもらう、そういうようなことを1つやっていけるといいのかなと思います。

それともう1つ、イタリアのレッジョエミリアに、世界で注目される幼児教育を実践している地域がありますが、そこにメディナという制度がある。その地域は、色んな生産するメーカーがあって、色んな部品が余る、そういう部品が余ったものを、綺麗にして、教材として提供するというシステムができています。つまり、京都にこれだけ色んな伝統産業に関わっておられる会社があって、様々なものが出てきますが、そういうものを廃棄するのではなくて、リサイクルして教育現場に持っていく、そのシステムをうまく導入できるとすごくいいと思います。例えば、子ども達が折り紙するのを、広告の紙でも良いんですが、これが一

流の方が作った和紙の切れ端でも良くて、この1つの持っている教育効果っていうのを子どもは感じ取るのです。広告の紙で作ると、一流の方の草木染で作ったものでは全然違う、そういうポテンシャルを持っている京都で是非そんなことを実現できたらと思います。

(鈴鹿委員)

学校現場で何ができるか、こういうことがもっとできればという要望も含めて言わせていただきたいと思います。

まず1つ目がやはり、京都では実物に触れる機会が多いことが絶対にあります。京都の実物に触れる機会として探究クエスト、これは本当に素晴らしいことだと思っています。京都にいる私達はあまり気づいていませんが、京都に来られた学生さんと話していたら、歴史の教科書のこの出来事が本当にここで起こった、これは本当にあったことなのだ、という話を聞きました。ずっと京都で過ごした私には驚きだったのですが、授業で学んだことが自分の世界の事なのだといきなり繋がる瞬間があるのです。実際に、せっかくその現場の近くに住んでいるなら、足を運んで、探究クエストとして、自分の町のことを知ってもらう授業ができないか、これは色んな地域でしたらいいのではないかと思います。

あともう1つ、実物に触れることで、Museum as cultural hubsの試みはすごく良いと思います。私は京都国立博物館の評議員をしており、その際にもよく言いましたが、ルーブル美術館では、学校単位で子ども達が来ていて、座って、好きなものを思い思いに模写しています。

日本の美術館では難しいかもしれませんが、その地域の場所ですし、色んな美術館に学校単位で訪れる機会が増えたら、そして、自由に見ていいことを教えてあげて、堅苦しくないところなのだとということからスタートするのは、大事なのではないかと思います。

どうしても日本では学校で行くとなると、皆で揃ってこれを見ましようとなりがちですが、そうではなくて、ここに来て、自由にこの部屋の中の地域の文化財でも選んで、それについて調べてという形で、どんどん出ると思うので、昔ながらのその1つを見るのではなくて、この探究っていうのは、進めてもらえたらありがたいと思います。

そして、色々されている中で1つ気になって、キーワードになると私は思っていたのですが、体験で終わるのではなく、今後も、普通の生活に馴染んでいくというのが大事だと思っています。例えば、Music Fusion in Kyotoは、オーケストラの方が来られてすごく良い試みですが、学校現場の方に聞くと、そのメンバーとなった場合に、楽器を買おうとなったらその予算はどれぐらいとか、既に持っているのはメンテナンスができないということもありましたので、学校ごとで興味のある学校が違うと思うので、公立学校だったら共有してとか、何らか新しい興味を持った子どもが増える機会を設けられたらと思います。

他に、ふれあい・心のステーションは、私も毎年寄らせていただいています。伝統のものを作ったりしていて、その場だけではすごくもったいないと常々思っています。例えば、もっと、企業さん、伝統工芸の方にPRをして、もっと色んな方に見に来てもらえれば、文

化と離れますけど、その後の就労に繋がるのではないかと思います。

企業としては、障害者の就労に興味を持つ会社は多いのですが、実際どれぐらいできるのかとか、どのような人達なのかが見えてこない、どうしていいかわからないと聞きますので、そのところをもっと企業にPRして貰ったら、ハードルが下がって、それをきっかけに伝統文化の方に就労する人が増えたら担い手にもなっていくのではないかと思います。

そして、家庭での文化、生活の中に文化があるというのは、本当にそうですが、ライフスタイルが変わっていて、そうではない家庭も増えているのは事実だと思っています。

なので、これは学校現場か、学校以外の場の方かわかりませんが、保護者をどう巻き込むかというのは、これからその文化がその子どもたちに継続していく、蓄積していくためには、絶対に必要と思っています。

例えば、夏休みに朝顔の観察日記をするというのも良いのですが、夏休みに急須で毎日お茶を入れた、どんな味のお茶か日記に書きましょう、という宿題があってもいいと思います。文化を体験していくというのを宿題にしてしまうのもいいかなと思っています。強制するのは難しいとしても、家庭と一緒に取組をしていくのは、その子どもに文化が定着していく1つになるかなと思っています。

最後に、和装の分野で、もう着物を着ることができる人が減っていて、着物の産業が衰退して、着物を着る人がさらに減ってとなっています。それは何か、府立高校を卒業したら着物を1回は着た、着物の着方を教えて貰った等あったら良いと思います。

(安岡委員)

歴史があり、御所もあり、食文化があり、寺社仏閣等、非常に恵まれた選択肢が非常に多いので、京都は全国的に比べると、断トツに文化的なものは非常に多いのです。

ただ、子ども達がそれを見たときに、この京都を代表するものは何だと聞かれたときに、答えられる文化の選択肢が広すぎて、答えられないのかなと思います。

京都あるある的なところを誰に聞いても、京都はこれが優れている、と出せなければならぬと思います。学校の教育では、例えば、歴史上の人物と言えば、紫式部が京都では多く出てくるのであれば、その人物にあてたその授業というのを全ての学校で共通でやっていくというものを持つべきではないかと思います。

それが、京都愛に繋がるか、京都に住んでいるか、住みやすいか、自分が望んで京都に住んでいるか等、私にとっても、そここのところはそれに繋がるような人材も、やっぱり京都のアピールにも繋がると思います。

(前川教育長)

京都の場合、身近に様々な文化があって、逆に、その価値とか背景の精神性とか、文化との違いも知っていて、気づかないことが実際に沢山あると思います。

京都は、高校生の海外留学の比率が日本で一番高いのですが、彼、彼女は帰ってくると、

京都はすごいと気づいた、すごく京都に対してリスペクトして聞いてくれる、一方で自分たちがその自分の文化について、いかに知らないかに気づいたと言います。

体験することも大事で、例えば、大阪・関西万博がありますが、ああいうところに行って、他文化に触れてくる、このことによって気づくことは沢山あると思います。ただ、その気づいた後にいかに深めるかということで、発信することで深まり、ひいては、担い手になっていこうという意識が出てくると思います。

そのためには、仕掛けが非常に大事だと思っており、今年、新たに始める高校生探究クエストですが、京都で3箇所、非常に文化的な価値の高い所でさせていただくのですが、これまでは京都では宗教教育は禁止されてきたので、宗教と関わることには非常に消極的でした。

もちろん宗教教育はできませんし、実際は外さなければなりませんが、京都の文化は、宗教を背景にしないと語れないものがあると思うのです。こういうふうに取り込んでいくということも必要なのかなというふうに思います。

探究クエストを今年させていただいていますが、特定の地域の中で、閉ざされた中で調べて、発表して終わりではありません。それを、例えば、京都市も含めて、広い他の地域の取組にも目を向ける、そういう場をいかに提供していけるかというのも、我々の政策にとって大事な視点だと思います。

例えば、美術館、博物館、府立図書館など、そういう所を学びの場として活用することも積極的に考えていく必要があると思います。文化を探究する、学ぶことは、一般的には文化系の学びという受けとめ方をされますが、総合学問に発展してくると思います。例えば、そこから建築であったり、お道具作りの技術であったり、様々な所に子どもたちの関心が広がる可能性があります。出来れば、小中高を通じて、竹串のような、総合的な学習の時間が一番適当なのかもしれませんが、系統的な学びを作っていけたら良いと思います。

(西脇知事)

実は今朝、松井京都市長と、今年度、第1回目の府市トップミーティングをしまして、探究学習については、去年のトップミーティングの1つ大きな成果で、12月に探究エキスポをさせていただきました。

令和7年度の探究については、府立高校と市立高校の探究学習の連携を深めていこうという流れです。探究学習というのは、文化と非常に親和性が高い、色んなことで勉強して欲しいなと思うもので、経済、産業、AIとか色々、その部分が非常に大きいです。

12月に私が経験したことでいいますと、例えば、丹後の方だと思うのですが、たたら製鉄について学んでいる学生がいて、非常に理科的な、技術的な勉強をして、それを再現したというのが素晴らしいことでしたが、私が、例えば、たたら製鉄が何で京丹後で、昔から存在したのかを調べたかと聞くと、それは知らないということでした。

これは明らかに平安京ができる前に丹後王国が存在したのは、大陸から鉄が来た流れが

あって、鉄を持っている量で当時の地域の豪族の権力が決まったはずだから、たたら製鉄の存在は、日本の古代史的にとっても大きな意味があるのではないかということを勉強してみたら、と言いました。子ども達は、あくまで製鉄技術として学習しておりました。

色々広がっていくと思っていて、そういう意味では部長にお願いしておかないといけません、探究クエストでもいいのですが、今後の展開の中で、ぜひとも、広がりもお願いしたいと思います。小畑さんの言われた客観視というのも非常に重要だと思います。私は、北野天満宮も東寺も縁日がある所だと思っていて、改めて歴史を紐解くと、そういう趣旨なのかとわかりますので、よく勉強させるということが必要だと思います。

藤本さんが仰っていたイタリアの幼児教育の話ですが、イタリアは結構面白いことやっている所で、その余った部品は伝統産業だけではなく、色んな意義があると思います。

伝統産業になると、鈴鹿さんも仰っていた和装文化もあるし、産業で成り立っているということで、和菓子でもお菓子でも誰かが作っているわけで、そういう所に思い至るということをやっていくというのが重要だと思います。

できる限り若いときから経験した方が良いというのは、令和4年頃に、私が高校の時に能を見に行って、野球の練習で疲れてずっと寝ていたと言ったら、前委員の千さんに、それでもいいのよ、経験したのだからと言われた。何かを経験するのは良いかもしれないし、興味ある人はそれを深くやっていくと思います。

ミュージックのイベントを京丹波町の新しくできた木造庁舎のロビーでした時、一流のクラリネット奏者が来られましたが、小さい子が騒いでも気にせず来られる雰囲気を作ると、本物に触れることができますし、本物に触れさせるっていうのは、何かの価値があるのではないかと思います。

後半は、子ども達の教育、育ちに詳しい教育委員という立場で、学校現場ではなくて、地域社会とか色んなレベルで、文化というものに触れる機会を作っていくことについて、何かアイデアや御意見があれば、お願いしたいと思います。今日は、文化財のことを話すと長くなりますので、文化財の活用は、関連することであれば御紹介いただきたいと思います、それ以外のところでお願いします。

(小畑委員)

条例を読むと、京都の文化を継承し、育み、学び、新たな価値を創造し、文化の力で地域を活性化するとあります。これを実現しようと思うと、何をしていけないといけないか、逆説的に申し上げますと、文化や、それを生み出すコミュニティ、これを時代に合わせて変えていくことではないかと思います。条例でも、京都の歴史、京都の文化は時代に合わせて変わってきた、そのことが、京都の長い歴史、あるいは成長につながったと書いてあります。

その通りだと思う。変化することなくして永続性はないということだと思います。

新しい価値、新しい生活スタイル、そういうものを持った若い人がどんどん増えていますし、新しい人間関係、新しい社会の関係を求めている若い人もどんどん増えています。だか

ら、京都に生まれていないけれど、京都に新しい生活の拠点を持ち始めた人が増えています。

そういう若い人、新しい人達の価値観、ライフスタイルに合わせて、コミュニティを少しずつ変えていくことです。そうすると、文化も変わっていきます。そういうことを進めていかないと、文化は永続しません。ましてや、その文化が地域とか京都の発展に寄与する力を長続きさせることはできないのではないかと思います。文化を変えるとか、コミュニティを変えるのは、根こそぎ変えると分からなくなりますから、根こそぎは変えられません。歴史的に積み上がってきた幹の部分に、時代に合った枝葉をすり合わせていく、そんなイメージが必要ではないかと思います。

先日、野村万作さんと萬斎さんの親子の狂言ステージを大阪のフェスティバルホールで見ました。お父さんは伝統的な表現で、息子さんはボレロで光と音楽の演出の中で舞い踊るのですが、衣装と所作は伝統的なものでした。新しいものを取り入れていくことで、フェスティバルホールの2,400席が満席でした。おそらく、伝統的な狂言だけでは、満席にはできないと思います。

つまり、伝統的な狂言に、新しい時代の枝葉をくっつけて、今の人達の感性に合った狂言ができたのです。まさに、幹に新しい時代に合った枝葉をつけて、文化とかコミュニティを変えていって、新しい文化を生んで、地域の活性化や京都の活性化に繋がると、こういうことではないかと思います。

幹の上に新しい枝葉をつけていくための公教育とは、どういうことができるかですが、地域との連携ではないかと思います。地域とは、地域の人、地域の会社、地域の方、農家、団体、もちろん地域に寺社仏閣もあるかもしれません。そういう全てと学校が連携をしながら、教育を作っていく、地域のコミュニティを変えることは、文化を変えることになります。

例えば、地域の会社は、市場の変化にものすごく敏感だから、市場が変わると経営に返ってくるからです。ただ、そこで働いている人、若い人達の新しい価値観、考え方、感性は、教育現場が一番よく知っていると思います。だから、若い人達の感性、価値観、行動パターンをよく知る学校と、市場をよく知る企業が、それぞれの強みを持ち寄って連携していけば、ものすごく面白い経営がそこから出てきて、その会社が成長し、地域もそれによって活性化していくというムーブメントを起こせるのではないかと思います。

地域のことを一番よく知っているのは、地域の人です。だけど、その地域の人の中でも、これからの世代を担う若い人達がどんなこと考え、覚え、価値観を持っているかを知っているのは、学校だと思います。だから、学校と地域の人がよく連携して、若い人たちの感性を知っている学校と地域が連携すれば、若い人の感性とか生活スタイルに合わない古いコミュニティが衰退しているけれど、そこに若い人たちの求めているものを入れていけば、そのコミュニティは変わるかもしれないし、変わることで続いていけるのです。

そして、続いているコミュニティから出てくる新しい文化は、その時代に合った大きな力になります。そういう循環を、学校が核になりながら、地域と作っていきます。こういう動きの中に、生徒を参加させます。そうすると、色んな意見を言うし、余計に若い人たちの意

見が入ってくるし、その中で、地域で何を考えているのか、会社は何を考えているのかを、生徒も学べます。こういう教育を、学校が核になり、起爆剤になって進めていくこと、それが、公教育の大きな役割ではないかと思います。

そうすると、コミュニティも、そこから生まれる文化も、新しい時代の感性に合ったものになってきて、皆に受け入れられ、評価され、文化というのが、地域や京都の発展に繋がる本当の力になります。こういうことにならないかなというふうに思っています。

そういう核に、学校がなる制度をやっていったらどうかと思います。

もちろん、これは教育だけではできませんので、この動きの中には、当然、行政の商工、農林水産、健康福祉、文化生活など、各部局が横断的にそれを支えていくことで、京都全体としての動きになります。新しいコミュニティ、新しい文化が新しい枝葉をつけてですね、変わっていった力を出していくことになると思います。

(藤本委員)

学校現場に戻りますが、京都探究クエストは本当に意味があると思っています。これはやはり府立高校しかできません。総合文化祭みたいなものです。それぞれの学校・地域が持っている価値観、興味、地域性を集大成としてできるっていうのはものすごく強みだと思います。ぜひ色んな広報をしながら、続けていくことがすごく大事だと思います。それが、文化の継続、掘り起こしに繋がっていくのかと思います。高校生目線で見た文化のとらえ方、アイデアは、我々がえっ、と思うようなことがあります。若い人達は、我々が思いつかないようなことを思いつきます。

うちの幼稚園が今年 100 周年ですが、皆でクラスの名前を変えようと、先生達で色々考えて、発表をどうしようと言いますと、始業式・入園式に園長先生から発表したらと言うのですが、若い先生は、インスタライブをしたら良いと言うのです。こういう感性で生きているのかと思います。そういう人達と、マッチングできる文化の捉え方は工夫が要りますし、若い人達のアイデアに素直に耳を傾けていることかなとも思います。

その上で、東京に一極集中しているという現状に非常に危機感を持っていて、この令和の時代に、地球温暖化も、少子化もですが、こういう流れが生まれなかったら、この国はどうなるのかと思います。それこそ、東京はデベロッパーが地域開発という名の下に、街を計画的に作り出します。歴史も商店街、文化もありません。ものすごく綺麗なヒルズができますが、そこに何があるのか。何か大災害が起きたらどうするのか、皆、全然、問題視しません。綺麗になればいい、住み心地が良くなればいい、でも、それはすごく上辺だけで、そこにストップをかけられるのは、文化が持つ力ではないかと、皆さんのお話を聞きながら思っていました。

例えば、伝統文化、お茶、和菓子、着物、踊り、色んなものがありますが、そのことを学んでその技を習得するということだけではなくて、それを通して、人間性が豊かになります。その人間性が豊かになることで、毎日の生活にゆとりができて、潤いができて、楽しさが増

していくところが、文化の究極だと思います。

それは、伝統文化に限らず、そういうものを皆で分かち合い、皆が日常的にちょっとでも感じることで、結果として、人への興味関心、それから敬意、色んなものが増えていって、皆のリベラルアーツというか、人間性が上がっていきます。自分さえよければ良い、自分さえ良い所に住んで、美味しいもの食べてではありません。そこには、色んな背景があって、色んな作り手がいて、色んなものがある、ここに届くようなことを、その文化を通して、人として学んでいけることです。文化を残すとか、文化を継承することも大事だけれど、人間教育力を持つポテンシャルが果てしなくある、そういうコンテンツが、京都にはいっぱいあります。そういうものを行政レベルで、上手く教育と絡めながら発信していくことです。京都が持っている、すごく今の日本の危機的な東京一極集中の状況に歯止めをかけるような、そういう京都の役割としてあるのではないかと思います。

でも、今の生活にはゆとりがないし、学校現場もゆとりがないから、文化を入れるという、そもそもの素地が、これを諦めないでちょっとずつできることをやっていくことだと思います。

(鈴鹿委員)

もっと小さい頃からの文化の体験に焦点を絞って申し上げます。小学校行く前の段階からやることに、やはり意味があると思ってしまして、4年前に当時2歳の娘が抹茶を飲んでいる話を御紹介させていただきましたが、今でも、その娘ですが、抹茶はもちろん好きで、好きなお菓子は八つ橋、五色豆、鍵膳さんの菊寿糖で育っています。昔から馴染んでいくと、普通に選択肢に入ると考えています。

選択肢に入ることが大事だなと思ってしまして、私の場合、元々、美術館、寺社に行くことが多かったので、休みにどこに行くかの選択肢、遊び場所として、お寺の境内、神社、美術館というのが、親子でのお出かけの選択肢としてありました。そういうことを繰り返してしましたら、子どもから上賀茂神社に行きたい、今日は美術館に行きたいという話をするようになってきました。

そういう場所には、連れて行きにくいと思う方もいらっしゃると思いますが、元々、お寺は子どもに開かれた場所で、神社も遊んでいても大丈夫な場所で、混んでいる場所に行くよりも、却って過ごしやすいのです。周りに聞いてみると、休みはショッピングモールしか行けないという話も聞きます。京都は、そういう子ども連れで行けるお寺も沢山ありますので、全然、ウエルカムですよというPRをしたほうがいいとは思っています。

安心されるというか、当たり前でしょうと、お寺の方と話していたらおっしゃるけれど、やはり、子育てされているお父さんお母さんは皆さん、気後れしながら来ています。

「泣いてもかしまへん」のシールは張られています、そこに連れていったら迷惑じゃないか、美術館も子どもがいたら怒られるのではないかというふうに思われるので、大丈夫ですよと発信していく方がいいのかなと思います。

あと、音楽のことに関して、先日、京都市で、きょうと・キッズ・フェスタという0歳から入るコンサートでお話をさせていただきました。実際に見ていると、0歳からいいですよということであれば、全員連れて来られるし、泣いても走ってもいいですよとありました。そこで、音楽が始まったら、赤ちゃんも急にピタッと前を見ているのです。音の力はすごいなと思って見ていました。お父さん、お母さんも、普通のコンサートでは大体小学生以上ですから、そうでないにしてもパッと連れて行きやすい、子どもOKですと言わなければ、行きにくいから、行きません。でも、子どもの日と開放されたら、これからでもこの子なら、連れていけるなというきっかけになると思います。

こういうことを音楽関係、美術館関係、お寺も、気を使わなくていいんですよ、と掲げて言っただけしたら、小さいころから文化に触れる機会になるのではないかなと思います。

(安岡委員)

学校現場だけではなくて、地域社会において地域住民を巻き込んで、伝統文化に触れてというのが非常に重要なところです。衰退しているコミュニティが、だんだん形も変わってきます。逆に、生活、そういったところがやっぱり大事だと思います。学校現場はゆとりがなく、働き方改革で、時間的なところが取れないと思いますけれども、そういった地域での文化に触れるために子どもたちが主体となってやっていけるような、1日そういった日を作ってあげることです。インセンティブを与えて、そういう取組をやっていくっていう形も、これからは大事だと思います。

また、今の若い子達と、我々の考え方と、それこそ発想の転換も含めて、もう新しい時代の考え方をどんどん取り入れて、コミュニティ自体も、変えていかなければならないと思います。

(前川教育長)

コミュニティを時代に合わせて変えていくということは、非常に重要になると思います。ただ、コミュニティの変え方は本当に難しいと思います。

例えば、様々な方に参画いただいて学校経営をしていく、コミュニティスクールという理念が唱えられて久しいわけですが、なかなか実態として進んでいません。

P T Aでも参加率は減って、自治会はもう入りませんと言われる方が増えてきました。様々なそういう旧来型のコミュニティに集まることへ拒絶感があると思います。一部の人たちが担うことに対する拒絶感、一部の人が決めていくことに対する拒絶感、様々だと思います。学校も、学校が用意した学び、学校が決めた学びを学ぶ場所という考え方から、学校が、学び、活動を集める場所になる必要があるのかなと思っています。

教員が全てを担うことはできませんので、地域の方々に何かをしていただく、そういう場所としての価値、そういうものを学校が担っていくこと、新しいコミュニティを考えていく上での1つの可能性かもしれないと思います。

例えば、地域、地元の企業の方が、できることで参加する、地元のお祭りを運営しておられる方が、子ども達の文化祭に関わっていただいく、そういうことができてくると、学校を場とした新しいコミュニティ、それが結局は、地域の文化、そういうものを継承していくことになるのかなと、漠然として考えました。

(西脇知事)

学校現場以外で、何か核となるものが必要だという事だと、我々は、地域コミュニティと saying いたのですが、学校現場と同じように、地域コミュニティが高齢化して、民生児童委員も、体育振興会も、防災委員も、全部やっている人は同じお年寄りということがあります。

いっぱい色んな役がついて、大変になっていて、それが減っているということがあります。うまく転換しているところがあって、どんなところがあるかなと見てみると、一つは、商店街が絡んでいるところです。昔から、商店街は地域コミュニティの核でしたが、今改めてそういう役割を果たそうとする人が結構集まってきました。例えば、商店街で夏祭りとか、定期的なイベントをしたら、びっくりするほど子どもがいるのです。

三条商店街、大手筋商店街、堀川商店街など。堀川商店街では、堀川まつりというのを年に1回やっていて、その子ども達は、堀川まつりが京都の3大祭りだと言います。祇園祭とPTAの秋祭りと堀川まつりと言うのです。要するに、自分たちが参画する祭りです。商店街に子育て世帯が住んでいるわけではないので、周りから集まってきたのです。

商店街では、子どもたちが残って、午後に勉強に来る日が決まっていて、そこにこの小さいボックスが置いてあって、絵本や本を全部入れていて、子どもが自由に読んでいます。新聞が入っていて、おばあさんが、ここで読んだら子どもも読めるし、勉強も教えられるとか、色んな動きが1つの核になるのが、商店街かなと思います。

そして、学校も1つの集まれる場所としては、あると思います。管理はちょっと大変かもしれませんが、場所が良いので、イベントをするときには非常に重要だと思います。

そういう意味では、地域文化ということで、一つは地蔵盆がそういうことでした。地蔵盆も子ども2人、大人20人ぐらい集まっている所が多いので、変えていく必要があると思いますが、コミュニティを変えていくには、根こそぎ変えることはやってはいけません。少しずつ変えていくのに、商店街の役割なんかも1つかと思います。それで、学校とそれがどうからんでいくのが重要で、そのための担い手ということになります。

昨年度に京都府で、京都版ミニ・ミュンヘンというのを2箇所で行いました。これはミュンヘンで2年に1回、2,000人ぐらいの子どもたちが、大きな公園に集まって3週間ぐらいですね、子どもたちだけで運営する街をやるのです。選挙で市長を決めて、リコールも出ます。清掃もするらしいのですが、いろんな商店をやっていました。それは、子どもの自律性、自主性のためにしているのです。

京都の場合は、目的を付加して、若い人が子どもと接する機会が少ないから、大学生とか高校生の人に参加してもらって、その準備のところをワークショップ形式で、イベントの始

まる前に3、4回実施してもらいました。高校生も、福知山と八幡でやりましたが、八幡では高校生がすごく喜んでくれました。八幡の大学生、高校生は、子どもと付き合いがなくてはじめは嫌々やっていたのに、2、3回目には自分達でやりたいということにまでなったのです。

奥山団地の本当に古い商店街の真ん中の駐車場で、大人は私と八幡市長しかいない状況で、子ども達だけで運営しているところで、選挙で負けた副市長が市長の悪口を言っていました。市長がいう事聞いてくれへんと。

それでも何か色んなものを販売して、15分働いたらカードにハンコがもらえて、ハンコのカードを持っていくと、銀行で給料が払われて、5枚仕入れられたら、その1枚を税金で納めるという風な状況です。

今回は、松井市長の同意を得ましたので、今年度は京都市内のどこかで行う予定です。明らかに高校生は非常に喜んで参加してくれていましたので、新しいコミュニティを作る仕組みは、少しずつ作っていったほうが良いと思います。商店街にも喜んでいただいたので、定着するまではやっていこうと思います。新しいコミュニティっていうのは1つのキーワードなので、そこは追求をしていきたいと思います。

探究学習は、非常に良い可能性が高いです。教育長、相馬部長に汗をかいてもらいたいと思います。カニが前に歩く探究学習や、所蔵している絵画の作者を探ることをやっていました。本来のカリキュラムを変えるよりは、比較的、柔軟にできるようなので、これは本年度追求していきたいと思います。

以上で終了いたします。